

近世アイルランドにおけるプロテスタント・エリートの「オールド・イングリッシュ」に対するまなざし

——エドモンド・スペンサーとジョン・テンプルを通じてみたその変化——

山 本 正

目 次

はじめに

I 「オールド・イングリッシュ」と「ペイル」のエリート層

- 1 16世紀における「ペイル」のエリート層とテューダー朝の「改革」
- 2 17世紀前半の「オールド・イングリッシュ」を取り巻く政治的環境

II スペンサーとテンプル

- 1 スペンサーとテンプルの経歴
- 2 「アイルランドの現状管見」と『アイルランドの反乱』

III 「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」へのまなざし おわりに

キーワード：「オールド・イングリッシュ」、宗教改革、テューダー朝、ステュアート朝、「三王国戦争」

は じ め に

17世紀前半——正確には1603年から1641年まで——は、戦乱に塗れたテューダー・ステュアート朝時代のアイルランドにおいては、例外的に平和が続いた時期である。しかし、この平和な時期に、アイルランドのエリート社会にある構造的な変化が生じた。自他ともに「オールド・イングリッシュ」と称したエリート集団の出現である。そして、このつかの間の平和な時期と、このエリート集団の出現にこそ、その前後を飾る数々の戦乱以上に、近世アイルランド史における、いやそれどころか800年に及ぶイギリス（イングランド、のちにブリテン）のアイルランド支配の歴史においてといってもよい、ある重大な転機を見出すことができるのである。

「オールド・イングリッシュ」の出現は、前世紀にテューダー朝がアイルランドで行おうとした二つの「改革」の帰結である。ひとつは世俗的な「改革」であり、ひとつは宗教的「改革」であった。それぞれについて簡単に説明しておこう。

まず、前者の世俗的「改革」について。テューダー朝初期のアイルランドは、中世盛期

に定着したイングランド系と先住のゲール系とを問わず大領主が、イングランド王権（＝アイルランド王権）から事実上独立して、私兵を擁し地域を支配する軍閥割拠状況であった。そうしたなか、王権の支配がかろうじて及んだのは、わずかに総督府が所在するダブリンとその周辺の「ペイル」と呼ばれた地域にすぎなかった。テューダー朝の世俗的なアイルランド「改革」とは、端的にいえば、こうした軍閥を解体して、アイルランド全島を王権の一元的支配下に置くことであった。王権は、硬軟両様の構えで、すなわち一方で軍閥との交渉を通じ、他方で抵抗する軍閥に対しては軍事力を振るいながら、また、征圧した軍閥の支配地域へのイングランド人の植民を行いながら、「改革」を進めていく。最終的には、アルスタのオニール族やオドンネル族を中核とするゲール系軍閥連合の反抗に端を発し、「ペイル」を除くアイルランドのほぼ全島に戦火が広がることになった「九年戦争」（1594～1603年）を惹起するも、その軍事鎮圧によって、まがりなりにも王権による一元的支配が実現することになる。すなわち、この「改革」はともかくも成就するのである¹⁾。

これに対して後者の宗教的「改革」は、イングランドにおけるのと同様の、国家主導の宗教改革である。ともにヘンリ8世治世の1530年代半ばに端を発するが、その推移はイングランドとアイルランドとでは対照的であった。すなわち紆余曲折を経ながらも、エリザベス1世治世の1580年代までにイングランドでは、中道的な国教会（アングリカン・チャーチ）が国民のあいだで定着する²⁾。これに対してアイルランドでは、これまた紆余曲折を経ながら、まさしくこの1580年代までに、国教会による既存住民の取り込みはほぼ絶望的となったのである。アイルランドにはむしろ、大陸の対抗宗教改革勢力が及ぶことになり、とりわけ既存エリート層のあいだに、トリエント公会議を通じて改革されたカトリシズムが浸透するのであった³⁾。アイルランド国教会は公式には国定教会でありながら、実質的には16世紀半ば以降にイングランドからアイルランドに渡ってきたプロテスタントの地主や官僚ら、一握りの新参エリートたちの教会にすぎなくなった。

このテューダー朝による二つの「改革」——ひとつは成就し、ひとつは挫折する——は、聖俗で忠誠の対象が異なる、すなわち世俗的には王権に忠誠だが、宗教的にはローマ教皇に忠誠な、アイルランド全島に広がるエリート集団を生み出すことになった。世俗的「改革」は支持もしくは受容したが、宗教的「改革」には背を向けた人びとである。「オールド・イングリッシュ」とは、この人びとを指して、ステュアート朝前期（17世紀前半）に自他ともに用いられた呼称である。その呼称からもわかるように、このエリート集団は、

- 1) 拙著『「王国」と「植民地」——近世イギリス帝国のなかのアイルランド——』思文閣出版、2002年、第1部「テューダー朝のアイルランド再征服」を参照のこと。
- 2) 岩井淳、指昭博編『イギリス史の新潮流——修正主義の近世史——』彩流社、2000年、第2章「宗教改革」（指昭博）。
- 3) Bottigheimer, K.S., 'The Reformation in Ireland revisited' in *Journal of British Studies*, vol. 15, 1976, pp. 140-149; Canny, N., 'Why the Reformation Failed in Ireland: Une Question mal posée', *Journal of Ecclesiastical History*, vol. 30, 1979, pp. 423-450; Bottigheimer, 'The failure of the Reformation in Ireland: une question bien posée' in *Journal of Ecclesiastical History*, vol. 36, 1985, pp. 196-207.

主として、中世盛期に入植・定着したイングランド系領主層の末裔から構成されていた。ただし、さきに示した政治的・宗教的立場を同じくする集団ということでは、世俗的「改革」を受け入れたが宗教的「改革」には背を向けたゲール系の領主（族長）層も「オールド・イングリッシュ」に含まれるといってよい。「君主の宗教がその領内で行われる」（アウクスブルクの宗教和議）という当時のヨーロッパの原則からすれば、変則的なエリート集団である。

この「オールド・イングリッシュ」に、はじめて本格的な研究の光が当てられたのは、いまから半世紀ほど前のこと、エイダン・クラークによってであった。プロテスタント・イングランド人とカトリック・アイルランド人との二元的対立で語られてきた従来の17世紀前半アイルランド政治史に一石を投じ、このような単純な語りには収まらない政治的集団としての「オールド・イングリッシュ」の存在を析出したのが、かれのモノグラフ『アイルランドにおけるオールド・イングリッシュ、1625～42年』⁴⁾である。同書は、「オールド・イングリッシュ」の存在とその政治的意義を明らかにしつつ、チャールズ1世時代のアイルランド政治史を書き換えた画期的著作である。クラークによると、「オールド・イングリッシュ」こそは、17世紀前半のアイルランドにあって、宗教的立場が国王のそれと異なるというハンディキャップがあるが故に、もっともまとまりのある政治集団であった。そして、王権にとってけっして無視できない、それどころか、アイルランド統治上、とくに地方政治レベルでは大きく依存せざるをえない政治的集団だったのである。それに比べると、プロテスタント（アングリカン）のエリート（地主・官僚）は、国王と宗教的立場をともにし、中央政府（総督府）は牛耳るようになっていたとはいえ、総じて地方レベルではまだまだ浸透度は低かった。

では、こうしたプロテスタントのエリートは、ライヴァルというか、目障りな存在であるはずの「オールド・イングリッシュ」をどのように見ていたであろうか。クラークはいうまでもなく、その両者、そして王権、この三者間の関係の重要性を認識している。かれは、その錯綜した関係——緊張関係もあれば協調関係もあった——の変遷を描くことで、17世紀前半のアイルランド政治史を書き換えたといってよい。いわば、ハイ・ポリティクスのレベルで「オールド・イングリッシュ」ならびにこれを取りまく政治的環境とその変化を考察したのである。ただし、そこには、プロテスタント・エリートが「オールド・イングリッシュ」に対して、どのようなまなざしを投げかけていたかという、いわば政治文化的な視座はない。クラーク以降の研究者にも総じてそうした関心は薄いといってよい。しかしながら、冒頭に触れた、近世アイルランド史、もしくは800年におよぶイギリスのアイルランド支配の歴史におけるある重大な転機は、まさしくそのまなざしの変化から照射しうるのである。本稿では、二人のプロテスタント・エリート、すなわち16世紀末のエドモンド・スペンサーと、17世紀半ばのジョン・テンプルの著述を取り上げ、両者における「オールド・イングリッシュ」、とりわけその中核を成した「ペイル」のエリート層へ

4) Clarke, A., *The Old English in Ireland, 1625-42* (MacGibbon and Kee: London, 1966).

のまなざしの違い（変化）を明らかにすることによって、その転機の意味を考察したい。

I 「オールド・イングリッシュ」と「ペイル」のエリート層

すでに述べたように「オールド・イングリッシュ」とは、テューダー朝の世俗的「改革」を支持または受容したが、宗教的「改革」には背をむけたアイルランドの既存のエリート層に対するステュアート朝期（17世紀前半）の呼称であり、この集団は、ゲール系も含みうるが、主として中世盛期に入植・定着したイングランド系領主層の末裔であった。なかでも、その中核をなしたのが「ペイル」のエリート（中小領主）層である。本稿は、プロテスタント・エリートのかれらに対するまなざし——その変化——の考察がメイン・テーマであるが、その前に、まずは、「ペイル」のエリート層が、「オールド・イングリッシュ」に固有の立場をとるに至った事情を、かれらのテューダー朝による「改革」との関係を通して簡単に説明し、さらに前期ステュアート朝期における「オールド・イングリッシュ」を取り巻く政治的環境（の変化）を、王権ならびにプロテスタント・エリートとの三者関係に焦点をあてつつ、概観しておきたい。

1 16世紀における「ペイル」のエリート層とテューダー朝の「改革」

「ペイル」のエリート層とテューダー朝の「改革」との関係については、すでに別のところで詳しく述べているので⁵⁾、ここではその要約を記すことにしたい。

すでに触れたように、中世末期ないしはテューダー朝の初期におけるアイルランドの大部分は軍閥割拠状態のもとに置かれていたが、例外が「ペイル」である。そして、テューダー朝の世俗的「改革」すなわち王権によるアイルランドの一元的支配の実現を望み、当初は積極的に支持したのは、「ペイル」のエリート層であった。「改革」の進展によって、自分たちのアイルランドにおける影響力も強化・拡大されることを期待もしくは当然視していたのであり、王権の利害と「ペイル」のエリート層の利害は一致すると思われていたのである。

ところがメアリ1世さらにエリザベス1世期になると、状況は変化する。「改革」が「ペイル」のエリート層の利害と衝突するようになるのである。そこには、「改革」の旗手として赴任してくる総督の統治スタイルが関わっていた。サセックス伯やサー・ヘンリ・シドニーがそうした総督の典型であったが、かれらの野心はアイルランドにおける「改革」の道筋を早々につけて、それを手土産にロンドンの宮廷での出世を図るところにあった。アイルランドは踏み台にすぎなかったといってよい。いきおい、かれらの手法はアイルランド現地、とくにダブリン総督府を包む「ペイル」のエリート層のあいだに支持基盤を築きながら、「ペイル」の外に「改革」を及ぼしていくというような、手間がかかり悠長なやり方とはらず、むしろ手短かに成果をあげようとして、イングランドから引き連れてきた

5) 前掲拙著、第1部第3章『「改革」に対するアイルランド既存支配層の反応』第2節『「ペイル」の反応』。

取り巻きと軍事力に頼ることになる。「ペイル」のエリート層は統治プロセスからは排除されていったのみならず、総督の手兵の維持コストも転嫁されていった。こうして、「改革」の手段をめぐって「ペイル」のエリート層は、総督もしくは総督府と次第に乖離していく。ただし、かれらが現地のエリート層であることにはかわりなく、「改革」そのもの（目的）を否定することも、また国王への忠誠が変わることもなかった。

では、そのかれらが、宗教的には、君主である国王と異なる立場をとるようになったのはなぜか。世俗的「改革」に反発して王権に叛旗を翻した軍閥のなかには、ヨーロッパ大陸の戦闘的なカトリックの（対抗）宗教改革勢力と手を結び、カトリック十字軍を名乗ってみずからの行動を正当化するものもあった。デズモンド伯の私兵団の棟梁で二度にわたって反乱を起こし、最終的にはデズモンド伯自身の破滅をもたらしたジェイムズ・フィッツモーリス・フィッツジェラルド、あるいは「九年戦争」の首謀者のティローン伯＝オニール族長ヒューなどがそうである。しかし、「ペイル」のエリート層の場合、大方はそうではなかった。

「ペイル」のエリート層は、イングランド型宗教改革、すなわち国家主導の宗教的「改革」に対しては、当初は少なくとも外面的には受容する姿勢を示していたし、「改革」には支持すべき理由もあった。王権の実効支配下にあるところでは、イングランドと同じくアイルランドでも修道院解散が行われたが、その恩恵を受けたのがまさしく「ペイル」のエリート層だったのである。そのかれらのあいだで、アングリカンの国教会が結局定着しなかったのは、国家の側の努力と資源の不足によるところが大きい。要するにテューダー朝国家には、アイルランドで世俗的と宗教的二つの「改革」を同時に実行する力にも意欲にも欠いていたのである。とはいえ、アングリカニズムを受容しなかったことと、大陸の改革されたカトリシズム（＝対抗宗教改革）を受容したこととは同じではない。

後者については、「ペイル」のエリート層の子弟の教育が関わるどころ大である。もともと「ペイル」のエリート層の子弟が、大陸、すなわち、フランスやスペイン、あるいはスペイン領ネーデルラントなどの諸都市へ留学するというのは、中世末から見られた現象であった。しかし、「ペイル」のエリート層と総督府との乖離が始まる16世紀半ば以来、その動きは加速的に高まる。アイルランドでの改革されたカトリシズムの波及には、イエズス会などの宣教努力によるところもあったが、「ペイル」のエリート層にあっては、対抗宗教改革の拠点であったこれら諸都市で教育を受け帰郷した子弟の影響が強かった⁶⁾。

こうして、テューダー朝の末期までに、「ペイル」のエリート層は、宗教的には大陸の改革されたカトリシズムを受容して、ローマ教皇に忠誠ながら、世俗的にはあくまでもプロテスタントの国王に忠誠だとする、信教国家化が進む当時のヨーロッパでは変則的な立場をとるようになっていた。そして、かれらを核にして、これに「ペイル」の外にあって、世俗的「改革」に順応しながらも、宗教的にはカトリックに留まった、あるいは改革され

6) Hammerstein, H., 'Aspects of the continental education of Irish students in the reign of Queen Elizabeth I' in Williams, T.D. (ed.), *Historical Studies: Papers Read before the Irish Conference of Historians, VIII* (Gill and Macmillan: Dublin, 1971) pp. 137-153.

たカトリシズムを積極的に受け入れていった旧軍閥や、その支配から解放された中小領主らも加わりながら、アイルランド全島に広がる「オールド・イングリッシュ」なる政治的エリート集団を形成していくことになるのである。

2 17世紀前半の「オールド・イングリッシュ」を取り巻く政治的環境

「オールド・イングリッシュ」には、アイルランドにおけるイングランド（王）の権益を守ってきた者として、自分たちこそアイルランドの統治を委ねられてしかるべき存在であるとの自負が強くあった。しかしながら、かれらには、国王と宗教的立場が異なるという、当時としては決定的ともいえる不利を抱えてもいた。ステュアート王権からすれば、「オールド・イングリッシュ」は、まさにそれゆえに信用できない存在であった。ジェイムズ一世がかれらを「半臣民」(half-subjects) 呼ばわりしている⁷⁾ のも、こうした不信感の表れに他ならない。

プロテスタント・エリートはこの点では問題なかった。じっさい、ジェイムズ1世治世においては、王権によるその増強が図られている。たとえば、「九年戦争」の首謀者ティロン伯やその一派が、赦されながらも結局1607年に大陸に逃亡した後、その旧支配地を没収して実施された大規模なアルスタ植民がそうである。「九年戦争」中も一貫して王権への忠誠を維持した一部のゲール系、いわゆる「功績ある^{デザイナー・ヴィンゲ・アイリッシュ}アイルランド人」にも土地は配分されたが、受益者の多くはイングランドならびにスコットランドの廷臣や「九年戦争」に従軍したプロテスタントの軍人であった⁸⁾。また、アイルランド中部地域でも、既存地主、つまりは「オールド・イングリッシュ」に対する土地権確定の見返りとして一部を拠出させた土地も総督府官僚や軍人などのプロテスタントに再配分されている。あるいは、1613年、およそ三十年ぶりに開催されることになったアイルランド議会の庶民院選挙でも、プロテスタント議員が多数派を占めるように、植民が行われた地域で84議席分のバラ選挙区が新設される——その結果、プロテスタント議員はカトリック議員を32名上回ることになった——など露骨な選挙対策が行われるのである⁹⁾。

とはいえ、王権はプロテスタント・エリートに全面的に依存して、「オールド・イングリッシュ」をアイルランド統治から排除するということはなかった。というか、そもそも、それは無理だったのである。議会の選挙では小手先的手段でプロテスタントの議席数優位を実現できたにしても、つまるところ、アイルランドの在地エリートとして、かれらは少数者にすぎなかった。アルスタのように、プロテスタントへの土地配分が集中的に行われた地域も含めてなお、アイルランド全島の土地の60パーセント近くは、カトリック——かならずしも「オールド・イングリッシュ」と同一視はできないにしても——が有していたのである¹⁰⁾。そのうえ、プロテスタント・エリートのなかには、蓄財と立身出世といった

7) Moody T.W. et.al. (eds.), *A New History of Ireland III: Early Modern Ireland, 1534-1691* (Oxford University Press: Oxford, 1976) p.217.

8) *Ibid.*, pp.197-200.

9) *Ibid.*, pp.210-214.

自己の私的利害の追求を優先して、公益（国王の利害）を損ねかねないような成り上がりの機会主義者も多くいた。ほとんど無一文でアイルランドに渡ってきたながら、アイルランドでもっとも富裕な大貴族として生涯を終えたコーク伯リチャード・ボイルは——すくなくとも蓄財と立身出世の過程においては——まさしくその代表的な存在であろう¹¹⁾。

社会の安定という観点からみても、「オールド・イングリッシュ」は無視しえない存在であった。エリート（支配層）の民衆（被支配層）に対するヘゲモニーが成立している方が社会の安定性は高い。この点、民衆と信仰上の立場が一致する——信仰の中身はともかくとして——「オールド・イングリッシュ」の方が、プロテスタント・エリートよりもヘゲモニーは容易に成立しえた（ただし、民衆レヴェルでもプロテスタント住民が多数を占めるような新規の入植地はそこかぎりではないだろうが、そのようなところはアイルランド全体からすれば例外的であった）。つまり、君主との関係では不利をもたらす信仰的立場が、逆に、民衆との関係では有利に働いたのである。在地エリートは君主と民衆の結節点の機能を果たすのであるから、ステュアート王権としても、アイルランド統治にあたって、かかる在地エリートとしての「オールド・イングリッシュ」を無視するわけにはいかなかった。

このように、ステュアート王権は、宗教上の相違から互いに反目する「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリート双方のバランスを取りながら、かれらを在地エリートとして用いつつアイルランド統治にあたっていたといつてよい。少なくとも1630年代初めまではそうであった。しかしながら、1633年にトマス・ウェントワースがアイルランド総督に任じられるに及んで、状況は劇的に変化する。

ウェントワースは、もともととはイングランドにおいて議会の権利を擁護する立場にあり、1628年の権利の請願にも署名しているが、その後一転して国王大権擁護に立場を変えた人物である。イングランド北部裁判所長官を務めたのち、アイルランド総督に任じられた。のちに初代ストラフォード伯を授爵する。アイルランド総督としてかれは、カンタベリ大主教ウィリアム・ロードとともにチャールズ1世の専制政治を支えたことにより、ロード・ストラフォード体制として名を残した。

では、総督として、かれはどのようなアイルランド統治を行ったのであろうか。それはまさしく専制統治といつてよい。国王からの全面的な信頼を背に、その代理者として国王大権を振り回し、「公益」（＝アイルランドからの国王の収益増大）のみをもっぱら追求して——ただし、これと矛盾しないかぎりでは自らの私益も追求するが——、在地エリートすなわち「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリートいずれも、「公益」を侵害する既得権益として、ないがしろにしたのである。

それはウェントワースの議会操縦に早速あらわれた。当時の議会は、王権と在地エリー

10) *Ibid.*, p. 428.

11) 拙稿「あるアイルランド貴族の成り上がり人生——近世イングランド人の旧き『新世界』——」、川北稔、指昭博編『周縁からのまなざし——もうひとつのイギリス近代——』山川出版社、2000年、136-160頁所収。

トのコミュニケーションの場であり、国王の要求（＝徴税）を認めるかわりに、在地エリートの要求・不満にも応えるという互酬関係が成り立つべき場のはずである。ところが、かれは、「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリートの対立をうまく利用しつつ、国王補助税を早々に議会に承認させると、直ちに議会を停会にしてしまったのである。

さらに、当時、在地エリートにとって富と政治権力の源泉であった土地に、ウェントワースの牙が向く。旧来の在地エリートのいずれをも腐敗した存在とみたかれは、アイルランドでの政治基盤を築くべく、新たな大規模な植民事業を企画する。ここで狙われたのは、「オールド・イングリッシュ」であった。中世以来の混乱によって、（究極的には国王に由来する）土地権原のあいまいな土地がアイルランドには多かった。当然、そうした土地を有したのは「オールド・イングリッシュ」にはかならない。ウェントワースはかれらの土地権原の不明確さについて、植民事業にあてるための土地の没収を目論んだのである。もっともプロテスタント・エリートも安泰ではなかった。こちらの場合は、アルスタ植民などで土地を獲得していた地主らがターゲットである。かれらは、先住民をテナントとはしない、決められた数の農民や職人をブリテン島から入植させる、要塞や街を築く、といった条件の下に土地を付与されていたのだが、目先の収益をあげるために履行しない者が多かった。ウェントワースはこれにつけこみ、こうした者の土地保有態様を、自由鋤奉仕保有から、国王への義務（地代）の重い騎士奉仕保有へと変更させたのである。

しかし、ウェントワースの専制統治にもやがてほころびが生じることになる。チャールズ1世（あるいはカンタベリ大主教ロード）の宗教政策への反発から、1638年にスコットランドで起こったプレスビテリアンの反乱（主教戦争）が転機であった。チャールズはウェントワースの助言で、反乱の武力鎮圧を行おうとするが、軍事的に却って劣勢に立たされてしまう。戦費を確保するために、イングランドでは11年ぶりに議会が開かれることになった。そして、これがウェントワースの運の尽きとなる。イングランド議会（長期議会）の反体制派はロードとともにウェントワースを君側の奸として弾劾した。問われたのはアイルランド総督としての行動であった。そして、これを側面から支えたのが、やはり同じ理由で開催されていたアイルランド議会である。そこでは、「オールド・イングリッシュ」とプロテスタントの議員が共闘態勢をとって、ウェントワースの統治に批判を浴びせていた。反目し合っていたはずのかれらは、ウェントワースという共通の敵を前にして結束したのである。アイルランド議会は「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント双方の議員からなる代表団を選んでロンドンに派遣し、イングランド議会による弾劾の根拠となるウェントワースの「非道」・「悪行」の数々を告げたのであった。こうして弾劾は成立する。国王チャールズ1世にも見限られたウェントワースは、1641年5月、刑場の露と果てたのである¹²⁾。

12) 以上、ウェントワースのアイルランド統治については、Kearney, H., *Strafford in Ireland, 1633-41: A Study in Absolutism* (Cambridge University Press: Cambridge, 1959 (1989)). なお、ブリテン諸島史（三王国史）のコンテクストのなかでウェントワースを再評価した論集が近年公刊されている。

しかし、それは、「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリートの共闘態勢の瓦解をも意味した。両者の宗教的立場の相違は一時棚上げされていたにすぎない。しかも、宗教問題は、チャールズ1世の専制体制のもとで、ブリテン諸島全体にまたがる深刻な緊張を生み出していた。魂の救済における人間の自由意志を重視するアルミニウス主義に傾いた国王チャールズならびに大主教ロードは、ブリテン諸島三王国にこれを押し付けようとした。これが、自由意志を否定し、厳格な予定説の立場に立つスコットランドのプレスビテリアンやイングランドのアングリカン急進派（ピューリタン）からの激しい反発を引き起こしていたのである。先に触れたスコットランドの反乱が生じたのはまさしくこの理由による。かれらは、チャールズのアルミニウス主義をカトリシズムへの傾倒と同一視した。つまり、ブリテン諸島におけるプロテスタントの反体制主義は反カトリシズムの要素を色濃く持っていたのである。いまやカトリックへの反発もしくは恐怖がブリテン諸島全体を吹き荒れていた¹³⁾。アイルランドのカトリックの側は逆に、ブリテン諸島のプロテスタントからの脅威をひしひしと感じたことであろう。

そのような状況のなか、1641年10月、アイルランドでもついに、北部のアルスタ地方から戦乱の火の手があがった。ダブリン城（総督府）占拠計画が直前になって情報漏れのために阻止されたにもかかわらず、これと連携していたアルスタでの武装蜂起が挙行されたのである。ダブリン城占拠計画の首謀者はマグワイア男爵コーナー・マグワイア、アルスタ武装蜂起の首謀者はサー・フェリム・オニールである。かつては、かれらはゲール系アイルランド人であることから、テューダー朝ならびにステュアート朝のもとで実施された土地没収・植民事業で奪われた所領を取り戻すために蜂起したとされていた¹⁴⁾。しかし、じっさいにはかれらは、「功績あるアイルランド人」にあたり、ステュアート朝のもとでむしろ所領を安堵され、政治的・宗教的には「オールド・イングリッシュ」というべき者たちであった¹⁵⁾。その行動には重い債務を負うなど自らの経済的苦境を打開したいという思惑もあったが¹⁶⁾、大義名分としてはカトリック信仰と国王チャールズの大権と祖国アイルランドの擁護を掲げていた。戦火はやがて、アイルランド全土に波及していき、アイルランドのカトリック・エリートは大同団結して、「神と王と祖国アイルランドのために」という、アルスタ蜂起首謀者の掲げた大義名分をそのままモットーとする組織、「カトリック同盟」を結成する。この「カトリック同盟」は戦乱によって政治的・社会的秩序が瓦

Merritt, J.F. (ed.), *The Political World of Thomas Wentworth, Earl of Strafford, 1621-1641* (Cambridge University Press: Cambridge, 1996).

13) Clifton, R., 'The popular fear of Catholics during the English Revolution', *Past and Present*, no. 52, 1971. 岩井淳「ピューリタン革命期の反カトリック問題」『歴史学研究』573号, 1987年, 94-105頁。

14) 松川七郎『ウィリアム・ペティ』下巻, 岩波書店, 1964年, 44-45頁。

15) Perceval-Maxwell, M., *The Outbreak of the Irish Rebellion of 1641* (McGill-Queen's University Press: Montreal, 1994) pp. 46, 204-211.

16) Gillespie, R., 'The end of an era: Ulster and the outbreak of the 1641 Rising' in Brady, C. and R. Gillespie (eds.), *Natives and Newcomers: Essays on the Making of Irish Colonial Society, 1534-1641* (Irish Academic Press: Dublin, 1986) pp. 191-213, esp. p. 195.

解するなか、カトリック・エリートの権益を維持するために樹立された自前の全島の統治機構といってよい。そして、そのモットーが示すように、この組織の政治的立場はまさしく「オールド・イングリッシュ」のそれであった¹⁷⁾。

1642年夏にはイングランドにおいても議会派と国王派の内戦が勃発し、ブリテン諸島全体が戦争状態＝「三王国戦争」に陥っていく。そうしたなか、アイルランドでは「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリートが、三王国全体にまたがる国王派と議会派の対立とも絡みながら、厳しく敵対していくことになるのである。

II スペンサーとテンプル

1 スペンサーとテンプルの経歴

前章でみたように、アイルランドに「オールド・イングリッシュ」という政治的エリート集団が出現するのは、テューダー朝の「改革」に対する抵抗勢力の最後の大規模な反乱(＝「九年戦争」)が生じる16・17世紀転換期のこと、そして、その「オールド・イングリッシュ」が自前のアイルランド全島の統治機構の結成に至ったのが、ステュアート朝統治が瓦解し、アイルランドが、あるいはブリテン諸島三王国全体が戦火に覆われる(＝「三王国戦争」)ことになった1640年代前半のことであった。では、このおよそ40年のあいだに、ライヴァルである「オールド・イングリッシュ」に対するプロテスタント・エリートのまなざしはいかに変わっていったであろうか。その変化を示唆してくれるのが、エドモンド・スペンサーとジョン・テンプルの著作である。まずは、著者のスペンサーならびにテンプルの経歴について概観しておこう。

1552年ころに生まれたエドモンド・スペンサーは、『妖精の女王』の作者として、イングランド・ルネサンス期最大の詩人と評され、英文学史上に燦然と輝く文学者として名高い。その一方で、デズモンドの反乱鎮圧に向けて派遣された総督アーサー・ 그레이の私設秘書としてアイルランドに渡り、 그레이の召還後も残留して、反乱鎮圧後デズモンド伯領を対象に大規模に実施された土地没収・植民事業で、マンスタ地方のキルカルマンという名称の所領を獲得する。そして、後述するが、テューダー朝の「改革」への抵抗勢力を、あるいは「改革」を阻む既存のアイルランド社会のあり様を、強圧的手段で徹底的に粉砕すべきことを唱えた人物でもある。典雅なルネサンス詩人と、アイルランド入植者で冷酷・残虐な主張を厭わない政治的論客という二つの顔を持つスペンサーであったが、この両者は矛盾するのではなく、『妖精の女王』も後者のラディカルな思想が色濃く反映しているというのが、近年の文芸批評家や歴史家の評価である¹⁸⁾。1594年に北部のアルスタ地方

17) ただし、「神のため」と「王のため」のどちらにウェイトを置くかをめぐって、内部分裂することになる。「カトリック同盟」について詳しくは、前掲拙著、第2部『「三王国戦争」とアイルランド」第5章『「神のため」か『王のため」か——アイルランド・カトリック同盟の内紛——』を参照のこと。

18) Fogarty, A., 'The Colonization of Language: Narrative Strategy in A View of the Present State of Ireland and The Faerie Queene, Book VI' in P. Coughlan (ed.), *Spenser and Ireland: An Interdisciplinary*

で勃発した「九年戦争」が、1598年にはマンスタ地方にも飛び火するなか、多くの入植地と同様、キルカルマンも破壊され、スペンサーは南部の都市コークに避難し、さらにロンドンに渡った。そして、ふたたびアイルランドに戻ることなく、スペンサーは1599年にロンドンで客死するのである¹⁹⁾。

ジョン・テンブルがアイルランドで出生したのは、その翌年の1600年のこと。父のウィリアム・テンブルは、論理学者で、また、スペンサーと並んでイングランド・ルネサンスを代表する詩人であるとともに軍人としても高名なフィリップ・シドニーや、エリザベス1世の寵愛を受けながら、政敵によって女王への反逆の罪を問われ処刑された第2代エセックス伯ロバート・デヴァルーに秘書として仕えたこともあり、1609年から27年に亡くなるまでダブリン大学トリニティ・カレッジの学寮長を務めた人物である。ジョンは、1620年にトリニティ・カレッジで修士の学位を得ると、同年ロンドンの法学院リンカン・インに進んだ。1630年代にロンドンの宮廷で第2代レスタ伯ロバート・シドニーの引きを得る。さらに、前任者からのポスト購入により、1641年8月にアイルランド記録所長官に着任すると同時に、アイルランド評議会——総督の諮問機関で、ロンドンの枢密院に相当する——の議員ともなった。1642年7月にはミーズ州選出議員として、アイルランド庶民院に議席を獲得している。イングランドでの内戦勃発後は議会派に与し、1643年には、国王チャールズ1世の命により、記録所長官の職務を停止されたうえ、1年近く投獄された。出獄後は、1646年にイングランド庶民院議員となり、議会のアイルランド問題監督委員会のメンバーとなっている。共和国期の1650年代には、クロムウェルの恩顧により、アイルランドの記録所長官職を取り戻すとともに、土地没収・植民事業（＝クロムウェルのセツルメント）²⁰⁾にかかわる役職にも就き、土地も得た。王政復古にさいしても記録所長官職は保証され、共和国期に得た土地についても、部分的にはその権利を確定されている。1673年にはアイルランドの大蔵次官に任じられ、1677年に死去した²¹⁾。

以上から、50年ほどの世代の差やアイルランドとのつながりに違い——一方はイングランドからの流入者、他方はアイルランド生まれ——があるとはいえ、エドモンド・スペンサーもジョン・テンブルも、ともにアイルランドのプロテスタント・エリートと見るこ

Perspective (Cork University Press: Cork, 1989) pp.75-108; Canny, 'Poetry as politics: a view of the present state of *The Faerie Queene*', in Morgan, H. (ed.), *Political Ideology in Ireland, 1541-1641* (Four Courts Press: Dublin, 1999) pp.110-126.

19) スペンサーのより詳しい経歴については、拙稿『『野蛮』の『改革』——エドモンド・スペンサーにみるアイルランド植民地化の論理』『史林』第76巻第2号、1993年、72-102頁を参照のこと。

20) クロムウェルのセツルメントについては、前掲拙著、第2部第6章「クロムウェルの征服と『ニュー・イングリッシュ』」を参照のこと。

21) Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography* (Oxford University Press: Oxford, 2004) vol.54, pp.68-70. ちなみに、王政復古期イングランドの著名な外交官で、ジョン・スウィフトが一時秘書として仕えたことのあるウィリアム・テンブルはジョンの長男である。また、19世紀パクス・ブリタニカ時代のイギリス外交を象徴する第3代パーマストン子爵ヘンリ・ジョン・テンブルはジョンの息子でウィリアムの弟であるジョンの直系の子孫にあたる。

ができよう。そして二人には重要な共通点があった。アイルランドを混乱の極みに落とす戦争をともに経験しているということである。スペンサーは「九年戦争」、テンプルは「三王国戦争」である。しかも、その経験こそが、本稿で取り上げる二人の著作を生み出しているのである。

2 「アイルランドの現状管見」と『アイルランドの反乱』

では、次に、スペンサーとテンプルそれぞれの著作について概観することにしよう。

はじめに、スペンサーの著作「アイルランドの現状管見」²²⁾から。その内容の詳細については別稿で述べているので、ここでは必要最低限のことがらだけ記すことにしたい。この論考は、「九年戦争」でアイルランドが騒然としていた1590年代に書かれた。ただし、生前には出版されていない。アイレニウスとユードクサスという2名の架空の人物の対話——前者が対話を主導、後者が聞き役で、スペンサー自身の分身は前者——というかたちで書かれており、「現状管見」というタイトルであるが、じっさいには「現状」の分析・考察に留まらず、後半部では、さきにも少し触れておいたが、それにもとづく冷酷・残虐な「改革」私案が提示されている。まず「現状」の分析・考察に関する部分についていうと、アイルランドの先住ゲール系社会の抱える大きく三つの「悪弊」——「法における悪弊」、「慣習における悪弊」、「宗教における悪弊」——を批判して、この社会をイングランド社会とはおよそ異なる、はるかに遅れた「野蛮な」社会と断罪するところに、その特徴がある。それを踏まえての「改革」私案の部分は、さらに二つの部分に分けられる。すなわち「改革」への準備段階を論じる部分と、「改革」の本段階を論じる部分である。前者では、王権に対する抵抗勢力の徹底的弾圧を主張し、焦土作戦や住民の強制移住といった、きわめて冷酷・残虐な主張が展開される。そのうえで、後者では、アイルランド社会そのものの根本的な「改革」——さきにあげた三つの「悪弊」それぞれの「改革」——が論じられるのだが、要はイングランド的な社会への「改革」である。そして、そのためには軍政を敷くべしとするところにも、かれの冷酷・残虐な面が顔を出している。じっさいのテューダー朝によるアイルランドの世俗的「改革」が、交渉や説得というソフトな手段と、軍事力というタフな手段を織り交ぜて行われたことはすでに述べたが、スペンサーは、前者を否定して、後者の、それも躊躇のない使用を通じた、根本的な「改革」——既存のゲールの社会の徹底的な破壊と、それを前提とした新しいイングランド的な社会の構築——を唱えたのであった²³⁾。

22) スペンサーの著作は、1633年に、ジェイムズ・ウエアによって編纂、出版され、ときのアイルランド総督ウェントワースに献呈されているが、部分的に過激な表現を和らげるような改変が施されている。1633年ウエア版のテキストは近年、ハドフィールドとマリーによって編纂され公刊されている。Hadfield, A. and W. Maley (eds.), *Edmund Spenser A View of the State of Ireland: From the First Printed Edition (1633)* (Blancwell: Oxford, 1997). スペンサーのオリジナル・テキストの刊行本としては、レニック編のものがある。Renwick, W.L. (ed.), *A View of the Present State of Ireland by Edmund Spenser* (Oxford University Press: Oxford, 1970). 前掲拙稿ならびに本稿でも、このレニック版を使用している。

つづいて、テンブルの『アイルランド反乱』であるが、これは、「三王国戦争」中の1646年にロンドンで出版されている。内容的には三部に分かれ、最初に反乱にいたるまでのアイルランドの歴史ならびに反乱初期の展開の記述、ついで反乱開始後のカトリック叛徒・民衆によるプロテスタントへの残虐行為の描写が続き、最後にまた反乱の展開の記述に戻っている。内容が重複する箇所も多々あり推敲を重ねたうえでの出版とはおよそ思われないが、とりわけ、反乱の展開（事態の推移）の流れを断ち切って、無理やりカトリックによる残虐行為の描写を挿入した感があり、全体の構成にかなり無理がある点が目立つ。この点に関しては、執筆はまず第2部から始められたのではないかという、R・ギレスピイの興味深い推測がある²⁴⁾。そして、この第2部にこそ、本書の最大の特徴、というか本質が顕れるのである。

この部分では、虐殺をはじめとしてカトリックの残虐行為がこれでもかというほど、さまざまな事例を挙げて描写されているのであるが、テンブルがこの部分を記すにあたってはある素材をもとにしていた。1641年秋にアルスタで武装蜂起が始まり、これに呼応するように各地で暴動が起こるなかで、多くのイングランド系プロテスタントの地主や富裕な農民が、かれらに土地を奪われ、あるいはかれらに重い債務を負うようになったカトリックの零落した旧地主や農民たちから報復を受けることになる。虐殺された者も多かったが、命こそ失わずに済んだが財産を失い、身一つでなんとか都市に難を逃れた者もまた多数に上った。ダブリンの総督府は各地に担当者を派遣して、そうした者たちから広範に事情聴取を行った。暴動前の状況や、かれらが保有していた（喪失した）財産、虐殺や暴行などの実態について直接目撃したこと、あるいは他人からの風聞などである。こうして多数の宣誓供述書が作成されるのであるが²⁵⁾、テンブルが利用したのはまさにこれであった。つまり、公文書をもとにした記述ということで、テンブルはみずからの著述の客観性をアピールしようとしたのである。ただし、かれの宣誓供述書の利用の仕方はおおよそ恣意的で、その狙いは、ひたすらカトリックの残虐性をイングランドのプロテスタント世論に訴え、アイルランドの反乱鎮圧への支援・助力を引き出すところにあった²⁶⁾。テンブルの『アイルランド反乱』は、その見かけや著者の言明とは裏腹に、徹頭徹尾プロパガンダの書だといってよい。ちなみに、この書は出版後ただちに、アイルランド・プロテスタントにとっての1641年反乱の正史ともいえるべき地位を獲得する²⁷⁾。また、後世に与えた影響も大きい。

23) 前掲拙論を参照のこと。

24) Gillespie, R., 'Temple's fate: reading *The Irish Rebellion* in late seventeenth-century Ireland', in Brady, C. and J. Ohlmeyer (eds.), *British Interventions in Early Modern Ireland* (Cambridge University Press: Cambridge, 2005) pp.315-333.

25) The 1641 depositions. 32巻あり、ダブリン大学トリニティ・カレッジ（TCD）の図書館所蔵。Clarke, A., 'The 1641 Depositions' in Fox, P. (ed.), *Treasures of the Library of Trinity College, Dublin* (Royal Irish Academy: Dublin, 1986) pp.111-122.

26) Bottigheimer, K. S., *English Money and Irish Land: The 'Adventurers' in the Cromwellian Settlement of Ireland* (Oxford University Press: Oxford, 1971) pp. 101.

27) Canny, N., 'What Really Happened in Ireland in 1641', in Ohlmeyer, J. (ed.), *Ireland From Independence*

そのことは同書が何度も版を重ねていることからうかがわれる。それも、たいていが、イングランドあるいはブリテン（アイルランドを含む）のプロテスタント体制が内外のカトリック勢力によって重大な脅威にさらされたときなのである²⁸⁾。もちろん、カトリックにとっては許しがたい書であることはいうまでもない。一例を挙げれば、名誉革命でイングランドを追われたのち、フランス経由でアイルランドに渡ったジェームズ2世のもとで召集された、カトリック議員が独占する1689年のアイルランド議会は、同書を焚書処分にしたほどである²⁹⁾。

このように、スペンサーの書とテンブルの書とでは、前者がアイルランド既存社会の「現状」分析とそれにもとづく「改革」案、後者がカトリック叛徒の残虐さをあげつらうプロパガンダの書というように、そのスタイルのうえでは同一レベルで捉えられない性格の違いが相当にある。しかし、同時に、双方には共通点があることも見逃してはならない。すなわち、ともに、戦乱という異常な事態のなかで執筆された時局的性格の強い著作で、かつアイルランドとの関わりの新しいプロテスタントが、アイルランドの既存社会・住民に対して抱く「偏見」が露骨に表されているところである。そして、その「偏見」は「オールド・イングリッシュ」に対しても向けられるのであるが、しかし、両者の「オールド・イングリッシュ」への見方は、とりわけ、「ペイル」のそれに関して対照的である。この点については、章をかえて検討することにしよう。

Ⅲ 「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」へのまなざし

スペンサーが、先住民であるゲール系の「アイルランド人」の社会や文化を「悪弊」として、イングランドのそれよりもはるかに「遅れた」、「野蛮」なものと捉え、これを徹底的破壊することが、かれのいう「改革」の前提条件であったことは先に述べたとおりである。では、中世以来の既存のイングランド系を、かれが「改革」の担い手として期待したかといえ、答えはまったくその反対であった。ユードクサスが、「イングランド人」によって旧き悪しき「アイルランド人」の慣習は廃れ、かわりにより開明的な慣習が育まれているのではないのかと問いかける³⁰⁾のに対して、スペンサーは、その分身であるアイレ

to Occupation, 1641-1660 (Cambridge University Press: Cambridge, 1995) pp. 24-42, esp. p. 25.

28) 1679年、1746年、1812年であるが、それぞれ、カトリック教徒による国王チャールズ2世暗殺計画なるもの（「教皇主義者の陰謀」）、第二次ジャコバイト反乱、ナポレオン戦争と関連している。なお、1698年にも再版されているが、このときはカトリックの脅威ではなく、イングランドの重商主義政策（とくにアイルランド産羊毛・毛織物に対する輸出規制）に対してアイルランドのプロテスタント支配層の一部に不平の声が生じたことと関連しているように思われる。なお、本稿では1679年版（*The Irish Rebellion, or An History Of the Beginnings and first Progress of the General Rebellion Raised within the Kingdom of Ireland upon the three and twentieth day of October in the Year of 1641, Together With the Barbarous Cruelties and Bloody Massacres which ensured thereupon. By Sir John Temple* (London: Printed by R. White for Samuel Gellibrand, 1679), Early English Books, 1641-1700 (STC II), Unit 42, Reel 1270) を使用した。

29) Gillespie, op. cit., p. 318.

ニアスに次のように語らせている。

ユードクサスよ、貴君のように私は考えない。というのは、かの王国における現在最大の悪弊はイングランド人に由来するからだ。そして、非常に野蛮なアイルランド人よりもはるかに無法で放縦なのがイングランド人なのだ。だから、かつてかれらがアイルランド人を改革するのに多大の配慮を必要としたが、いまではそれ以上の配慮を働かせてかれらを改革しなければならないのだ³¹⁾。

…かれら〔イングランド人のこと…筆者註〕はいまや、アイルランド人とほとんど同じくらい邪悪になっている。わたしが言うイングランド人とは、西部の方に入植した連中のことだ。というのは、イングリッシュ・ペイルは国家権力〔総督府のこと…筆者註〕に近接していることによって、かなりの都^{シヴィライティ}雅を保持しているからだ。しかし、アイルランドでもっとも土壌の豊かなコンノートとマンスタに住む残りの連中や、レンスタとアルスタの一部の連中は墮落して、野蛮なアイルランド人と同じくらいとても patchock³²⁾ になっており、なかにはイングランド人の姓名をまったくかなぐり捨てて、アイルランド人の名前を採用しているものもある。この連中などまったくのアイルランド人といってよからう³³⁾。

アイルランドの「イングランド人」が「墮落」して「アイルランド人」並みもしくは「アイルランド人よりもアイルランド人」的になってしまうというのは、中世末期以降、軍閥が跋扈するアイルランドの現状を批判して、「ペイル」のエリートが用いた常套句である。スペンサーもまたこの伝統に棹差していた。「墮落」の原因として、かれがとりわけ挙げるのは、ジェラルディン家（デズモンド伯家とキルデア伯家）とバトラ家（オーモンド伯家）の二大イングランド系権門が享受した「自由」である。名目上はイングランド王の代行（総督）であるその息子や兄弟、親族の代理人にすぎないはずなのに、かれらが実質的にはアイルランドを壟断し、増長するようになったこと、そして両家が敵対して私闘を繰り返すなかで、「アイルランド人」を取り込んでいき、その勢力をよみがえらすとともに、自らは「アイルランド人」と同じくらいに猥雑になってしまったと³⁴⁾。本稿「はじめに」で、中世末期のアイルランドは軍閥割拠状態に陥っていたことに言及したが、これをもたらしたのは「イングランド人」大貴族の「自由」ゆえの「墮落」＝「アイルランド人」

30) Renwick, *op. cit.*, p. 62

31) *Ibid.*, p. 63.

32) この語はスペンサーの造語らしいが、まったく意味不明である。Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner (eds.), *The Oxford English Dictionary*, 2nd edition (Oxford University Press: Oxford, 1989) vol. 11, p. 331.

33) Renwick, *op. cit.*, p. 64

34) *Ibid.*, pp. 63-64.

化だとスペンサーは言うのである。

ただし、スペンサーは、批判の対象である「イングランド人」から「イングリッシュ・ペイル」を除外している点を見逃してはならない。「ペイル」はかなりの「都雅」を保持しているとスペンサーはいう³⁵⁾。かれのいう「イングリッシュ・ペイル」が、16世紀を通じてイングランド王に忠実で、17世紀には「オールド・イングリッシュ」の中核を成すことになる「ペイル」のカトリック・エリートを指していることはいうまでもない。なるほど、「野蛮」の基準を「アイルランド人」的というところに置き、「改革」をもっとも要するのが中世以来の「イングランド人」だというのも、かれらが「墮落」して「アイルランド人」並になってしまっているが故だとする論法からすれば、イングランド的な社会・文化を十分に残していた「イングリッシュ・ペイル」をスペンサーが例外扱いせざるをえなかったのは当然であった。

このように、スペンサーから「アイルランド人」以上に厳しい視線を投げかけられていた既存のイングランド系のなかにあって、例外的に温かい目でみられていたのが、のちの「オールド・イングリッシュ」の中核となる「ペイル」のエリートであったが、半世紀後には、次世代のテンブルの手によって、まったく別物扱いされることになる。

ブリテン諸島全域を覆った「三王国戦争」の一環として、アイルランド王国を十年以上にもわたって戦火のもとにおいたカトリックの反乱の直接の契機となったのは、1641年10月のダブリン城占拠計画ならびにアルスタ蜂起であった。マグワイア男爵やサー・フェリム・オニールといった首謀者たちは、先に言及したとおり、民族的にはゲール系だが、政治的・宗教的には「オールド・イングリッシュ」の範疇に含むことのできる地主＝エリートである。すでに16世紀のテューダー朝期にも、王権による世俗的「改革」を受容する、17世紀であれば「オールド・イングリッシュ」の範疇に入れてしかるべきゲール系のエリートは存在した³⁶⁾が、スペンサーはそうした存在にはまったく言及しない。かれは、「アイルランド人」(ゲール系)が「野蛮」であることを当然の前提としたうえで、「イングランド人」の「墮落」＝「アイルランド人」化を嘆くのみであった。これに対して、テンブルのまなざしはおおよそ異なる。なるほどテンブルもスペンサー同様、イングランド人の「墮落」＝「アイルランド人」化になお言及するのであるが、その一方で、「アイルランド人」の側では「開化」＝「イングランド人」化が、ステュアート朝下の四十年で進んだと指摘するのである。そして、そうした「開化したアイルランド人」の一人としてテンブルが名前を挙げているのが、アルスタ蜂起の首謀者フェリム・オニールなのである³⁷⁾。そのうえで、反乱の真の首謀者はかれらではなく、真の黒幕が存在するとテンブルはいう。では、真の黒幕とはだれか。テンブルは二つのグループを挙げている。ひとつはカトリックの聖職者である³⁸⁾。そしてもうひとつであるが、これについてはテンブルの記述を引用してみよう。

35) Ibid., p. 64.

36) 前掲拙著第1部を参照のこと。

37) *The Irish Rebellion...by Sir John Temple*, p. 14.

38) Ibid., p. 59.

サー・フェリム・オニール、マグワイア卿、フィリップ・オライリ、マクブライアン大佐、ヒュー・マクマホン ならびにかれらの郎党、アルスタ、ならびにこれに隣接する諸州のアイルランド人諸氏族の長が、まず舞台に登場し、その血まみれの処刑行為で、この恐るべき悲劇における主人公であることを堂々と宣言した。けれども、反乱はかれらが共同で謀議したもので、かれらが先頭に立って謀ったものでなかった。かれらのほとんどは従属的な存在にすぎず、かれらは（王国全土の主要な貴族とジェントリとともども）いついつのときに、いついつの場所で行動するか、各自の行動地域を割り当て、最初に採られた決定にしたがって動いたにすぎない。そして、そうした指示をかれらは、本元の陰謀者から受けていたのだ。わたしがもっともありえそうだと思うのは、あいまいな陰謀が具体化される段になったのち、（ゴーマンストーン卿が本元の、主要な発起人のひとりとして）かれやペイルの主要な貴族たちが共謀して（以前の諸反乱すべてのときにしたように）オールド・アイリッシュの主たる氏族を抱き込んで関与させ、表舞台に立たせたのだ。そして、かれらが共同謀議し、かくもあざやかに事態を展開させたのち、かれらはそれを第一級の貴族・ジェントリの全般的合意を取り付けた、王国全土すべてのカトリックの全面蜂起（サー・フェリム・オニールが名付けたように）に仕立てたのだ³⁹⁾。

つまり、カトリックの聖職者と並んで、反乱の真の黒幕としてテンブルが挙げるのが、まさしく「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」であった。フェリム・オニールらゲール系地主の「開化」をテンブルがわざわざ記述しているのも、「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」のあくどさを際立たせるためのたんなるレトリックだったのかもしれない。『アイルランドの反乱』において、全体の構成を不自然にしてまでも、エリートと民衆とを問わずカトリック全般の蛮行を宣伝しようとしたテンブルであったが、同時にかれにとって、「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」こそ究極の攻撃目標であったように思われる。

16世紀末と17世紀半ばの半世紀間での、「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」に対するプロテスタント・エリートのまなざしのこのような一変は、とりもなおさず、アイルランドにおけるかれらの置かれた立場の変化を物語っている。

テューダー朝による「改革」に乗じてアイルランドに新規参入してきたスペンサーの世代のプロテスタント・エリートにとっては、なによりも世俗的「改革」の対象であり、阻害要因であった「ペイル」の外で独立的地域権力を行使する軍閥が、最大のライヴァルであり、これをたたくことが自らの存在理由を明確化できるとともに、自己の利益にかなった。この軍閥にはゲール系（スペンサーのいう「アイルランド人」）とイングランド系（同じく「イングランド人」もしくは「オールド・イングリッシュ」）があったが、両者のあいだで民族的な行動様式の相違があったわけではない。そして、こうした軍閥跋扈

39) *Ibid.*, p. 65.

という悪弊を、ゲール（「アイルランド人」）的社會・文化の「野蛮な」特質と、イングランド系の「墮落」＝「アイルランド人」化として表象するという中世末期以来の「ペイル」のエリートの言説を、プロテスタント・エリートも流用できたのである。テューダー朝のアイルランド「改革」には宗教的なそれ、すなわち「宗教改革」もあったが、スペンサーにとっては、宗教的「改革」よりもまずは世俗的「改革」の方がなによりも重要課題であった⁴⁰⁾。そうしたなかで、イングランド王に忠実で、イングランドの社會・文化を保持する「ペイル」のエリートは、スペンサーにとって、宗教的には立場を異にするといえども、いまだかならずしも強力なライヴァルではなかったといえよう。

しかし、テューダー朝の「改革」のうち、世俗的「改革」は多大の人的・物的犠牲を払いながらも成就を見たあとの、しかし、宗教的「改革」については挫折が確実になっていた17世紀ステュアート朝下のアイルランドでは、プロテスタント・エリートの立場もまったく異なるものになっていた。テューダー朝の世俗的「改革」を生き残りつつも、宗教的「改革」は拒んだ「オールド・イングリッシュ」は、いまや一部のゲール系地主も含んで、全国的なエリート集団となった。このエリート集団は、政教一致が原則の近世ヨーロッパにおいて、宗教的には国王の立場と異なるというハンディを負っていたが、それだけに結束力が強く、王権への忠誠と、自らこそがアイルランドにおけるイングランド王の利害の代表者にして擁護者であることを強く主張した。そして、その宗教的立場の故に、王権はかれらを不信の目で捉え、アイルランド中央権力（ダブリン総督府官僚）からこそ追放していったとはいえ、地方統治においては、在地エリートとして無視することはできなかった。これに対して、プロテスタント・エリートは宗教的には国王と同じであり、この点では「オールド・イングリッシュ」よりも有利な立場にあったが、如何せん、アイルランドにおける在地エリートとしての実力はなお劣っていた。このように、「オールド・イングリッシュ」とプロテスタント・エリートとは、イングランド王＝アイルランド王の臣民として、それぞれに一長一短を抱えつつ、同じ土俵で争う関係であった。つまり、後者にとって前者はライヴァルだったのである。1641年に始まったカトリック反乱は、プロテスタント・エリートにとってその存在の危機であると同時に、「オールド・イングリッシュ」をたたき、アイルランドにおけるエリートとしての独占的地位を獲得しうるチャンスでもあった。なかでも、歴史的にも空間的にも中央権力の座に近接し、「オールド・イングリッシュ」の中核を成す「ペイル」のカトリック・エリートは、かれらにとってどうにも目障りな存在であっただろう。プロパガンダの書である『アイルランドの反乱』において、テンブルが「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」を描く、その表象の仕方がなによりも、そのことを雄弁に語っているのである。

40) この点は、スペンサーにおいて、アイルランドの「悪弊」のうち、「法の悪弊」と「慣習の悪弊」の議論にくらべて「宗教の悪弊」への論及がきわめて短く、またこれに対応して、「法の改革」と「慣習の改革」の主張がきわめて過激であるのに比べて「宗教の改革」のそれが穏健であることが示唆してくれる。詳しくは、前掲拙稿『「野蛮」の「改革」——エドマンド・スペンサーにみるアイルランド植民地化の論理』、とりわけ80-87頁。

お わ り に

以上、16世紀末・17世紀初にアイルランドで形成された、世俗的にはイングランド王に、宗教的にはローマ教皇に忠誠の立場を採る「オールド・イングリッシュ」というエリート集団、なかでもその中核を成す「ペイル」のそれに対して、エドモンド・スペンサーとジョン・テンブルという、ともにプロテスタント・エリートに属すが、およそ一代離れた二人の人物のまなざしにおおきな違いがあったことをみてきた。すなわち、前者は、「野蛮な」アイルランド社会・文化の「改革」にとって、「墮落」して「アイルランド人」化してしまった「イングランド人」を最大の障害とみなしつつ、「イングリッシュ・ペイル」すなわち、17世紀の「オールド・イングリッシュ」の中核となる「ペイル」の既存のイングランド系エリートについては、例外扱いせざるをえなかった。これに対して、後者は、この「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」こそを、カトリックの聖職者とともに、1641年に勃発したアイルランド反乱の真の黒幕と断罪したのであった。そして、それは、17世紀前半の半世紀をはさんだプロテスタント・エリートのアイルランドにおける政治的立場の変化を物語っていた。すなわち、ゲール系とイングランド系を問わず「ペイル」の外の王権にまつらぬ独立的な軍閥から、カトリックであるが故にとりわけ王権への忠誠を強調する全国のエリート集団である「オールド・イングリッシュ」、なかでも「ペイル」のそれへと、プロテスタント・エリートにとっての最大のライヴァルが大きく変化したのである。

さらに、スペンサーとテンブルとでの「ペイル」の「オールド・イングリッシュ」に対するまなざしの違い（変化）は、800年にわたるイングランド（ブリテン）のアイルランド支配の歴史における大きな転換をも示唆するものである。ゲール文化圏のなかに位置したアイルランドに対して、中世盛期（12世紀）にイングランド王がその領有権を獲得し、イングランド（アングロ・ノルマン）貴族が侵入して以来、この島はアイルランド（ゲール）文化圏とイングランド文化圏がせめぎ合う場となった。いいかえれば、イングランドのアイルランド支配の目的は、イングランド文化圏の全島への拡大とアイルランド（ゲール）文化圏の消滅であったといつてよい⁴¹⁾。そして、イングランド文化の側に立つ者たちには、遅れた「野蛮な」アイルランド文化を進んだ「都雅な」イングランド文化をもって「改革」という、「文明化の使命」の中世・近世版ともいふべき心情が生まれる。もとより、イングランド文化を維持すべきとみなされた者たちのなかには、アイルランドにおいてゲール文化と接し、これに同化する者もいたし、あるいはイングランド文化の規範を逸脱する者もいた。しかし、そうした者は「墮落」して「アイルランド人」になったと表

41) ただし、中世末期の14・15世紀には、1366年制定の有名な「キルケニ法」にみられるように、むしろアイルランド文化圏の巻き返しに対してなんとかアイルランドにおけるイングランド文化圏を防衛するという消極的な姿勢を余儀なくされた。「キルケニ法」については、Curtis, E. and R.B. McDowell (eds.), *Irish Historical Documents, 1172-1922*, (Methuen and Co: London, 1943 (rep. 1977), pp.52-59.

象しえたのである。プロテスタントながら、スペンサーはむしろその伝統に棹差し、かつそれが出来た最後の世代の人間であったといえよう。

しかし、テューダー朝の世俗的「改革」の成就とともに、民衆レベルではともかく、エリートのレベルでは少なくとも、ゲール文化圏はアイルランドから消滅したといつてよい。アイルランドのエリートは——エリートとして生き続けようとする者は——、もはや、ことごとく「イングランド人」なのであった。しかし、ほぼ時を同じくして、アイルランドには新たな次元の対立——プロテスタンティズムとカトリシズムの対立——が持ち込まれる。その対立はエリートの「イングランド人」のあいだで苛烈な権力闘争を引き起こさざるをえなかった。プロテスタント・エリートとカトリック・エリートの「オールド・イングリッシュ」の対立である。テンプルは、アイルランドのエリートが宗教的立場の相違の線に沿って分裂し対立する新しい時代の申し子であった。そして、プロテスタントのテンプルは、プロテスタンティズムとカトリシズムの衝突という性格の濃厚な1640年代のアイルランド反乱のなかで、宗教的エリートのカトリック聖職者とともに、世俗のエリートたる「オールド・イングリッシュ」の中核的存在である「ペイル」の貴族・ジェントリを、反乱の真の黒幕として、槍玉に挙げた。プロテスタント・エリートとカトリック・エリートとの生存をかけた権力闘争の苛烈さを、これは物語っているのである。

ちなみに、この、プロテスタントのエリートとカトリックのエリートとの権力闘争の行方にも簡単に言及しておこう。決着は17世紀の末についた。前者の全面的勝利である。これによって「オールド・イングリッシュ」というエリートの範疇は消滅し、アイルランドは少数者であるプロテスタントのエリートが多数者であるカトリックのノン・エリートを支配するという「プロテスタント優位体制」が18世紀に成立する。この体制は、政治的には18世紀を通じて、社会経済的には19世紀の末もしくは20世紀の初めまで存続することになる。そして、その体制のなかで、プロテスタント＝イングランド人／ブリテン人、カトリック＝アイルランド人という対立の構図が育まれていく。つまり、宗教的相違・対立が民族の相違・対立に転化していくことになるのである。